

メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第78号

[2015年11月号]

NPO法人メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。
JAM 会報メール第78号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ/ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へJAMの最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

<目次> [ページ]

JAM × BRIDGE 合同活動報告会

メソトマンスリー

国内から

国際保健医療協力のなかで (31)

編集後記

次号の予定



JAM × BRIDGE 合同活動報告会

11月7日土曜日に新宿の国立国際医療研究センターで活動報告会を開催しました。

今回は初の試みとして国立国際医療研究センターで働く有志で結成された国際協力を志す人達のサークル「BRIDGE」と共同で開催いたしました。BRIDGEの活動報告に続き、JAMからは森紗耶香よりJAMの事業全般の報告、今年8月から現地派遣員となった神谷友子より9月に行ったスタディツアーの報告、9月まで現地派遣員を務めた鈴木みどりより在任期間中の現地での活動報告、最後に代表の小林潤より「難民と子供の貧困格差社会と地球温暖化の視点から」についてお話しさせていただきました。ご参加頂いた方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。



活動報告会は毎年開催しています。会報だけでは十分にお伝えできないことも含めて、現地の活動の状況や日本での活動について皆様に直接お話し出来る年一回の機会です。そして日頃ご支援くださいます皆様や初めてJAMに関心を持ってくださった方々と、直接お会いできる機会でもあり、JAMが大切にしているイベントです。

来年も開催しますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております！

メソトマンスリー



【メソト＝神谷 友子】

移民学校とミャンマーの学校のこどもの栄養改善プロジェクト開始しました

メータオ・クリニックの学校保健部門、ヘルスマネージャーのスタッフと前任の鈴木看護師が以前より準備を進めていた栄養改善のプロジェクトが、先週いよいよ本格的に始まりま



した。

JAMが以前より支援している移民学校の一つHOPE校と、ミャンマー国内にある約500人の住民が住むティマワキ村にある学校の2か所で、5歳以下のこどもを対象に栄養状態を調査して栄養に関する教育や食料配布を計画しています。

先週は学校保健のスタッフと一緒にHOPE校へ出向き、身長と体重の測定を行ってきました。その場で、WHOの指標にもとづいたスケールを用いて、標準からどれくらい逸脱しているかのチェックをしました。9月に歯科部門から学校保健部門へ移動してきたカレムさんと、学校保健部門ではリーダーシップを取って後輩の指導もしているサンミントンさんが手際よく作業を進めてくれました。HOPE校では、親元を離れて学校の寄宿舎に住む生徒の部屋が狭く広くしたいとの要望が先生からあったため、9月に日本の森ご夫妻からの支援金を渡しました。そのお金で建築資材を買い、先生や近所に住む親御さんたちで手作りしたそうです。増築作業が無事の終わって広くなった寄宿舎も見せてみもらいました。

また、今週はミャンマー国内のティマワキ校で、同様の身長体重測定と、こちらでは保護者の方にも集まってもらって、学校の先生と保護者の方を対象とした栄養についてのワークショップを行いました。ワークショップの前後に、質問用紙を配布して簡単な知識確認チェックをしたのですが、文字を読めない大人が多く、スタッフがそれぞれに説明しながら行っていました。この村でこのようなプロジェクトを実施するのが初めてで、メータオ・クリニックのスタッフも、字を読めない大人がいることは想定外だったようでした。「次回は質問票に写真を入れて分かりやすくしたほうがいいね。今回はアセスメントが目的だから、いい勉強になった。」とスタッフも言っていました。メソトでこのようなワークショップを行うときはパソコンにプロジェクターをつなげてパワーポイントで説明している姿をよく見ていましたが、この学校には電気が通っていないためプロジェクターが使えません。大きなボードに写真や説明書きを張ったパネルを作成して持っていきました。そして水道もこの学校までは通っていないため、手洗い場を設置したいとのことで、学校に水道を引くための水道管と蛇口などの材料も運び込みました。現在は近隣の家までは水道が通っているため、そこでバケツに水を汲んで学校にためおいて使用しているようでした。コップはみんなで1つだけで使いまわしは感染のリスクもある、手を拭くためのハンカチがないから、今度来るときは全員にコップとハンカチを1つずつ持ってきてあげたいね、とスタッフと話をしていました。

なお、このプロジェクトは公益財団法人公益推進協会の夢屋基金による助成事業です。

<http://kosuikyo.com/> (公益財団法人公益推進協会 HP)

夢屋基金様からの助成金でこのプロジェクトが実施できること、メータオ・クリニックのスタッフも私も本当にうれしく思っています。11月にアセスメントをした後に、12～3月の4か月間で食料配布、最後にまた身長と体重を測定して最終的に評価をしたいと計画しています。このようなプロジェクトを実施するのは私にとって初めてのことです。分からないながらもメータオ・クリニックのスタッフやJAMのメンバーがサポートしてくれて、いい取り組みになりそうです。今後も日本からのご支援よろしく願いいたします。





写真1：HOPE校にて身長体重の計測



写真2：HOPE校の昼食の様子



写真3：HOPE校 計測後にチャートと照らし合わせて評価中。



写真4：ミャンマー国内のティミャワキ校の幼稚舎



写真5：ティミヤワキ校の昼食の様子



写真6：知識の確認のためのミニテスト。白いTシャツのメータオクリニックのスタッフが読み書きできない保護者に説明しています。



写真7：ワークショップ。5大栄養素の説明などを学校保健のスタッフがしていました。



写真8：広くなった HOPE 校の寄宿舎



写真9：賛助会員の島根様も HOPE 校への訪問に同行されました。

きょうのゆめ

以前、JAMの会報で掲載していた「きょうのゆめ」、私は好きだったので久々に復活です。メータオ・クリニックのスタッフにお話しを聞かせてもらいました。今後、メータオ・クリニックのスタッフを中心にいろいろな人の夢を聞けたらいいな、と思っています。

今回は、メータオ・クリニックの副院長の一人であり、診療部門の責任者であるムニさんにお話しを伺いました。夢屋基金の栄養改善プロジェクトでも一緒に活動している方です。

ムニさんは1978年生まれの38歳男性。メータオ・クリニックでは勤続17年のベテランスタッフです。ミャンマーのカレン州、PHALU パルーという街に生まれ4歳まですごしました。今から34年前、ムニさんが4歳の時に街で政治的な紛争が起こり、銃撃戦が続いたそうです。ムニさん一家は身の安全を守るために走って逃げてモンカン難民キャンプにたどり着いたとのこと。その後ウンピャン難民キャンプに移り、18歳で難民キャンプ内の高校を卒業。難民キャンプには大学がないためキャンプ出て、知人のついでメータオ・クリニックで働き始めたそうです。

まずは薬局部門で8か月、外科病棟で2年、内科病棟と小児科病棟でメディックとして6年を経て、病棟の責任者を4年間、その後に管理職となりマネージャーとして2年間、副院長になって3年という経歴です。

ムニさんの奥様もメータオ・クリニックのスタッフで、かわいい3人の女の子のパパでもあります。音楽が好きで、たまにスマートフォンで音楽を聞いていたりしている姿をみかけます。前任の鈴木看護師の送別会の時に私がトランペットを演奏した時も、とても喜んで動画を撮影してくれていました。こちらの人は音楽が好きな人がとても多いです。仕事でもみんなよく鼻歌を口ずさんでいたりします。

そんなムニさんに「あなたの夢はなんですか?」と聞くと、「夢はない」との答え。夢は、追っている途中で見失ってしまうものだから、とのこと。「夢」ではなく、「目標」なら持っている。それは、自分の持っている医学の知識とスキルでミャンマーの人を助けることだと話してくれました。世界中の人を助けることは自分にはできないけど、自分の周囲の人を助けることならできると。そして、今後のことを聞くと、自分のスキルにもよるけど、メー



タオ・クリニックの若いスタッフたちを導く手助けをしていきたい。彼らが適正な役職についたり、もっと責任をもって仕事ができるようにサポートしていきたいと語ってくれました。

ムニさんは、ミーティングで話し合いの時は真剣に議論し、個人的に話をするときは本当に優しい目をしていて、私の持っている荷物重くない？話についてこれてる？何か困っていることはない？？といつも気遣ってくれています。マネージャールームの外でもいろんなスタッフと話をしていたり、本当に管理職に向いている人だと思います。この先も、ムニさんが育てたスタッフがメータオ・クリニックや、ミャンマー国内で活躍していくことを願っています。



写真1：ムニさん。栄養改善プロジェクトで一緒に行ったティミャワキ村は、ムニさんのご両親がかつて住んでいた村です。ティミャワキ村の診療所でお話を伺いました。



写真2：インタビュー中、ムニさんが私のカメラで撮ってくれました。



写真3：ロイカトンのお祭りで、ムニさん一家にばったり出会いました。

国内から



【北海道＝田畑 彩生】

タイ国内で実施した Dengue 熱予防教育事業を通して

昨年から戦後 70 年ぶりに日本でもお騒がせの Dengue 熱…

2015 年も引き続き国境の街メソトで Dengue 熱予防事業を実施した。タイでは今年 Dengue 熱が流行し、11 万人を超える感染者数と 100 名を越える死者を出した。私が住むターク県でも 5 年ぶりに大きな流行の年となった。

タイの医療機関では、入院患者の Dengue 熱対応や診断技術など専門機関の対応が適確であり、ワクチンや治療薬の無い Dengue 熱とは言え、他の隣国アセアン諸国と比較しても全体の死亡率は低く出ている。

また、公衆衛生・保健活動がタイのコミュニティー向けには充実しており、村長を始めとし、村のご長寿の皆さんがボランティアとして蚊やボーフラの駆除パトロールを毎週実施するなど住民を巻き込んだ活動も盛んだ。

また、地域保健を担う小型診療所なども地域を巡回し蚊の発生をコントロールする事に一役を担っている。それでも、蚊を媒介とし、人の免疫に関連した感染症疾患である Dengue 熱は大変予防や感染管理が難しいと言われている。

地域住民参加型の予防教育が充実しているタイのコミュニティー活動の一方、移民として暮らすビルマ/ミャンマー人、カレン人のコミュニティーや難民キャンプ内へ直接アプローチする様な事業としては保健活動が乏しかった。2012 年夏から開始した家庭訪問による Dengue 熱予防事業は、現在ターク県全土を対象地域とし、タイ語・ビルマ語・カレン語の 3 言語の Dengue 熱予防活動媒体と予防教育用ビデオ 2 本、ラジオ、新聞などの地元メディアを活用し、国境地域の移民学校など約 70 校を対象とした保健事業となった。

タイの公衆衛生部門やメソト総合病院を始め、IOM などの国際機関や難民キャンプで活動する保健医療団体、国境で活躍する NGO、JAM やメータオ・クリニックを始めとした医療保健事業を担う団体が Dengue 熱事業に参加してくれている。

Dengue 熱研究事業に詳しく、タイで 40 年以上にわたり Dengue 熱の治療研究を先導してきたウサ・ティサヤコーン教授に先日お話を伺った。

「Dengue 熱は、顧みられない熱帯病として分類されてきました。未だに治療薬も確実なワクチンも開発されていない Dengue 熱ですが、今年やっとワクチン開発が臨床段階にまで上がってきました。ワクチン開発が始まって 50 年…ひとつのワクチンを開発するのに 50 年は実は長過ぎるのです。それは、Dengue 熱が貧しい国々でのみ発生する感染症としてみられて来たからなのです。」

ワクチン開発が進んだ後も安心出来ないとうサ教授は強調する。

「ワクチンが開発されたとしても、人々が Dengue 熱についての関心を深めて理解し、蚊の発生を防止する活動や刺される事を予防する様な対策は必須です。人々の責任ある行動と地



域社会への積極的な協力が、デング熱の予防には必要なのです。」と。

今夏、台湾の特に台南地方でデング熱が流行し全土で120名以上の死者が発生した。アセアン諸国を始め、日本、オーストラリア、アメリカなど世界100カ国以上で感染が確認されているデング熱は、流行国のアジアなど海外から持ち込まれた輸入感染である事も多い。もう、熱帯特有の感染症とは言えない。

WHO発表によると、世界人口の約72億人のうち39億人がデング熱に感染する危険性があると指摘している。

物流や人の移動が活発となる今日、この様に顧みられなかった熱帯病への対策が重点課題として認識され、計画が立案されることに注目をして追っていききたい。

感染症を予防する為の情報がすみずみまで行き届き、地域活動に積極的に参加出来る様、学校での予防教育が充実する様、人々がデング熱などの感染症を予防する術を身につけられる様、今後も継続的に活動していききたいと思う。

蚊は、人種も国境も性別も分け隔てはないのだから。



国際保健医療協力のなかで (31)

【東京＝小林 潤】



格差是正、これを本気でやった経営者が事業に成功してきている。この会社がどうなったか非常に興味があった。しかし素晴らしい結果がでている。

アメリカのグラビティ社である。実はCEOのプライス氏は今年4月、会社の最低年収を7万ドル（約830万円）に引き上げると発表した。そしてその原資は自身の年収の減額から出している。資本主義が隅々まで基本の哲学となっているアメリカにおいては、実は賞賛よりも中傷にもさらされていた。事実、賃金上昇にかかるコストが、手数料上昇に影響すると予想した顧客が契約を解除したり、さらには株価の下落にもつながったようだ。しかし10月にプライス氏は、収益は2倍に増え、第2四半期の顧客維持率も91%から95%に増えたというインタビューに答えている。

国全体も本当にできないのだろうか、国の経済を立て直すには富めるものが富むようにすべきなのか。その結果、中国は本当によくなっているのか。格差と地球温暖化が子供の貧困を生んでいて、日本も例外ではない。さらに地球規模でみると、これが難民の増大につながっている。ピケティも最終的にいいたいことは格差是正だ。日本は総中流で成功してきたはず。いまからでも取り戻せると思う。ちなみに私も医師免許をもってこの会社最低年収ほどで生活している。それなりに満足している。もし1千万や2千万を超える日本の医師の年収を10%削減して、社会保障にまわしたらどうなるか。医師不足であるので医師の確保には高い報酬が必要との考えもある。しかし多くの日本の医師はこれ以上高い報酬より、生活の質の改善による幸福や社会保障強化への貢献を望むのではないかと思う。

産業革命をもたらしたイギリスは、その当時から格差社会で貧困層が苦しんでいた。これをみた岩倉使節団の若い日本人はそのような社会をつくってはいけなさと、他のヨーロッパもよくみて、日本ならではの独自の社会をつくっていったことを、知っていますか。

ちなみにこのCEO、ダン・プライス氏はサーファーだ。カッコいいと思いませんか。資本主義にかわる新しい主義をつくりだすのはこういうカッコよさかもしれないということも読んだことがある。そういう人種がふえているのだそうだ。頭のさえている人たちと概念化したいとも思う。もう一度ロン毛にしたい。これは無理だけど。

編集後記

本州最南端の町、串本町に大島という島があります。そこの漁港の食堂で今が旬の伊勢海老の天井を食べてきました。おおきい伊勢海老まるまる一匹が天井に。ちいさい伊勢海老のみそ汁と白和えの小鉢、キンカンのデザートがついています。



フェイスブック : Japan Association for Mae Tao Clinic (JAM) で検索して下さい。

※掲載されている全ての内容、文章の無断転載を禁止します。



